

創世記12章1-4節 a

ローマの信徒への手紙4章1-5、13-17節

ヨハネによる福音書3章1-17節

本日の旧約日課は、新しい聖書日課になりかなり短くなりました。以前は、創世記12章1-8節でしたが、新しい聖書日課では4節 a までです。箇所としては、創世記1章から11章の原初史がおわり、旧約聖書の物語が始まる箇所の冒頭です。

お話の出来事は、「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい』」と、主なる神様が、アブラハム（まだアブラムですが）に命じ、アブラハム（アブラム）はその命令に従って出かけて行ったというだけです。しかし、その間に「私はあなたを大いなる国民とし、祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福の基となる。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う人を私は呪う。地上のすべての氏族は、あなたによって祝福される」（12：2-3）という、アブラハムへの祝福の言葉があります。この言葉が示す通り、アブラハムは、主なる神様の偉大な国民の基となった人であり、主なる神様から大変な祝福を受けた人です。それゆえに、アブラハムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教を信じる人の父であるとされます。それら三つを「アブラハムの宗教」と呼ぶ所以です。

教会において、アブラハムが注目されるのは、本日のような創世記の記述があるからということもありますが、パウロが、このアブラハムを信仰の模範としたからです。そのことについて触れているのが本日の使徒書の箇所です。「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書は何と言っていますか。『アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた』とあります」（ロマ4：2-3）は、パウロが、行いによる義ではなく、信仰による義を明確に主張した有名な箇所です。そこにある実際の引用箇所は、本日の旧約日課ではなく、創世記の15章6節です。

しかし、パウロは、律法の有効性を否定したわけではありません。「死者を生きかし、無から有を呼び出される」（ロマ4：17）という主なる神様の意思を、イエス様の十字架と復活に見出したのです。つまり、イエス・キリストを通じた信仰によって、律法を実行できた人かどうかではなく、誰にでも救いが完成する、それこそが主なる神様の意思であることを確信したのでした。

このパウロの信仰による義という主張は、信仰義認か、行為義認かという対立概念に集約され、信仰は精神が大切か、行為が大切かへと展開し、さらに教会は内向きがよいか、外向きがよいかなどの議論へと広がっていきます。20世紀はそのような議論が盛んに行われましたが、現在でも継続していると思います。しかし、パウロが語る、信じて義とされるという主張は、精神的な事柄のみについて語ったのではなく、イエス様の十字架と復活という出来事に基づく主張です。

出来事が背景にあるのです。またパウロは、その信仰に基づく人の集まりである教会こそは、あらゆる隔てを超えた人間の集まりでなければならないと、教会形成に懸命でしたが、ローマに革命を起こそうとするような活動家ではありませんでした。おそらくローマという社会を直接的に良くしようとするような、外向きの活動はほとんどしていないと思います。パウロの教会での働きは、町の人々に向けた慈善事業を行うような外向きの行動ではありませんでした。しかし、ローマという様々な面で発展と成長が進む社会の中で、その時代の常識を超えた、まことの人と人との関係を回復するような革命的な集まりでした。パウロが目指したイエス様が示す信仰による義とは、イエス様の出来事を模範とする人の集まりを形成することに集中し、そしてそうであるがゆえに、イエス様を模範とするという意味では、教会を通して何かが示されるという意味で、行為面が否定されることはないのです。

さて、パウロが語る信仰の義という事柄の基は、イエス様の十字架と復活ですが、ことに復活が最も重要です。本日の福音書もなぜ復活が大切かという事柄について触れています。本日の福音書は、イエス様とニコデモとの物語ですが、ニコデモは、ファリサイ派の教師として登場します。そして、ニコデモは、イエス様が神から遣わされた人かどうかという前提から考えようとしませんが、イエス様はその前提を無視し、いきなり「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と結論から答えます。この会話になっていない描写が、ヨハネに福音書の特徴といえますが、そうであるがゆえに大切な結論を示します。ただし、ニコデモは、その結論にある「新たに」という事柄を理解できませんでした。次にイエス様は、「水と霊とから生まれる」こと、ことに「霊から生まれること」の重要性について語り、「(神の) 霊」についての事柄を問題とします。ニコデモはそのことも理解できませんでした。そして、それゆえにニコデモは、「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか」とイエス様から叱られるのですが、その理解できないニコデモの姿が、反面教師的に模範になると本日の福音書は示します。イエス様の復活の出来事、パウロが大転換をした基となるその復活という出来事は、理解することではなく、信じることであるからです。それは、イエス様を通して人間に向き合おうとする主なる神様の目的が、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」(ヨハネ 3:16-17) であるからです。それは言い換えれば、主なる神様の愛とは、人間が理解する対象ではなく、信じる対象であるということです。

ご自身の御子を十字架に捧げる主なる神様の愛は、何よりも信じることのできる事柄です。この世界で唯一信じることのできる事柄ともいえるかもしれません。そして教会はその愛を学び、実践する場所であるとも言えます。大齋節という事柄と合わせるならば(アドベントもそうですが)、この愛について改めて学ぶことが大切節の学びです。今年も学び深い大齋節を過ごしたいと思います。